

2023年奄美大島南部リーフチェック結果報告書

- ・ 実施日時：2023年11月15日（水）9:00～12:00
- ・ 主催：瀬戸内町海を守る会
- ・ 調査地：瀬戸内町安脚場沖
- ・ チームリーダー(TL)：祝 隆之（瀬戸内町海を守る会会長）
- ・ チーム科学者(TS)：興 克樹（奄美海洋生物研究会会長）
- ・ 参加者：9名（瀬戸内町海を守る会7名、瀬戸内町役場1名、奄美海洋生物研究会1名）

○調査概要

当調査ポイントでのリーフチェックは、23年連続23回目の実施である。2001年から2005年にかけて、奄美大島南周辺海域では、オニヒトデが大量発生しサンゴは壊滅的なダメージを受けたが、調査地点は、2002年6月にサンゴ保全海域に設定、継続して駆除が行われサンゴ群落が保全されて優れた海中景観が保たれており、ダイビングやシュノーケリング等の観光資源としても活用されている（投錨によるサンゴ破損を防止するため海を守る会では係留ブイを設置）。調査地点は、加計呂麻島安脚場沖の約200mに広がる礁斜面で、水深5mと水深10m地点にそれぞれ100mの測線を設定し、測線におけるサンゴの被度や魚類指標種の数、無脊椎生物の数など指定された項目について潜水調査を行った。

○調査結果

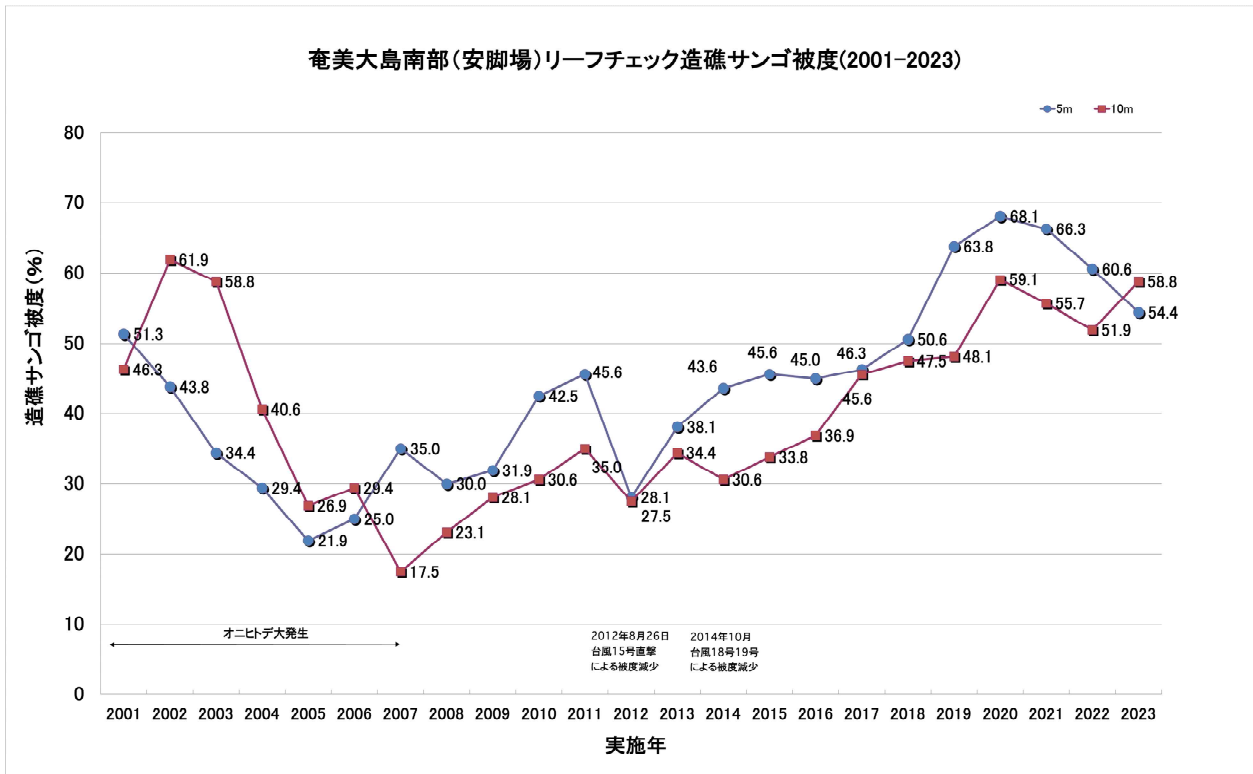
2023年夏期に、大島海峡では高海水温による白化の発生は無かったが、本調査地の大型のドーンミドリシ群体は大雨による泥水等の影響とみられる白化が発生し、本調査時にはドーンミドリシ群体の約4割が部分死滅していた。それに伴い、生サンゴ被度（海底に占める生きたサンゴの割合）は、5m測線では54.5%と減少した。10m測線は58.8%と増加した。サンゴ群集は概ね良好な状態であった。

水深5m測線では、生サンゴ被度が2022年60.6%から2023年54.4%と減少した。白化後に部分死滅したドーンミドリシは、群体下部が部分死滅しており、高海水温ではなく、大雨時の泥水等の影響により死滅した可能性が高い。調査時には白化の進行等は見られなかった。ドーンミドリシ以外のサンゴ群体では死滅はみられず、概ね良好な状態が保たれている。魚類出現数はチョウチョウオ類は2022年46個体、2023年38個体と減少した。無脊椎生物ではシャコガイ類が2022年は確認できなかったが、2023年は13個体みられた。オニヒトデはみられなかった。

水深10m測線では、測線前半は樹枝状ハマサンゴ類やコモンサンゴ類が優占し、側線後半は樹枝状ミドリシ属が優占する。生サンゴ被度は2022年51.9%から2023年58.8%と増加した。魚類出現数はチョウチョウオ類が2022年46個体から2023年52個体と増加した。無脊椎生物はシャコ貝類が2022年11個体、2023年12個体とほぼ同数であった。オニヒトデはみられなかった。

両測線周辺とも新規加入のサンゴは少ない状態が続いているが、大型ミドリシ属群体が生存しており、幼生の供給源や観光資源としても重要である。23年間サンゴが壊滅する事無く保全されていることは、サンゴ礁保全の成功例といえる。また、近年のボートシュノーケリングツアーの増加に対応するため、海を守る会ではダイビング用の係留ブイに加え、2021年から同海域浅所にボートシュノーケリング用の係留ブイを設置し、サンゴ礁の適正利用を推進している。

(調査結果)



(調査写真)

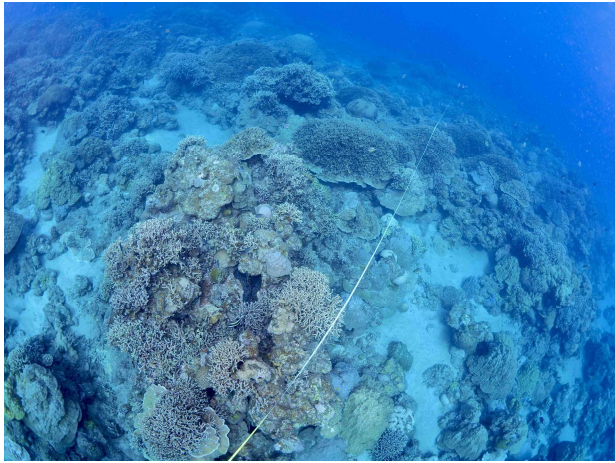


图 1. 水深 10m 測線 始点付近

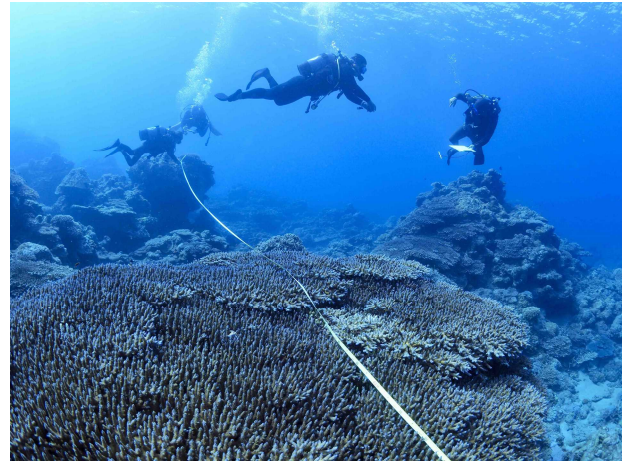


图 2. 水深 10m 測線 終点付近



图 3. 水深 5m 測線 始点付近

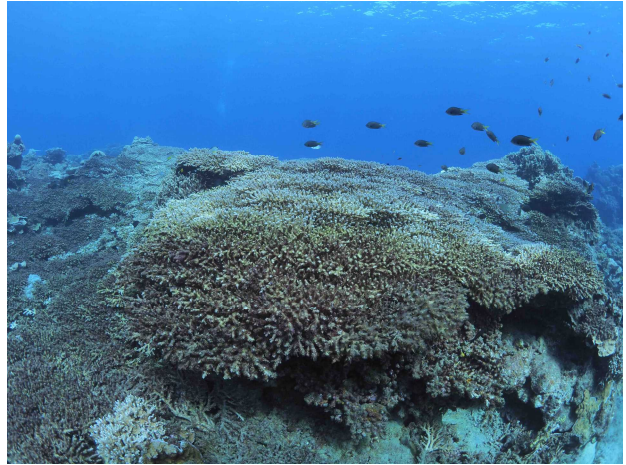


图 4. 水深 5m 測線周辺 部分死滅 (手前暗色部)



图 5. 水深 5m 測線



图 6. 水深 5m 測線 終点付近